

家族パワーで築く堅実な養豚経営

—ブランド肉豚「ほろよい豚」の生産拡大をめざして—

有限会社 飯田養豚場（養豚経営・青森県横浜町）

地域の概要

有限会社飯田養豚場の所在地である青森県横浜町は、下北半島のつけ根に位置し、西側は陸奥湾に東側は六ヶ所村に接している。主な産業は漁業と農業で、漁業ではホタテ養殖が盛んで、特産品のナマコは町の魚に指定されている。農業では企業グループによる養豚・



(写真1) 家族写真

ブロイラー産業が農業産出額を大きくしている。また、大手菓子メーカーと契約栽培している加工用ジャガイモ栽培も盛んで、その輪作作物であるナタネの「菜の花」を町のシンボルとして、町おこしのイベントが行われている。

毎年5月になると一面の黄色い菜の花畑が広がり、巨大な菜の花大迷路も制作される。菜の花の作付け面積は約100ha（令和元年度）であり、日本有数の作付け面積を誇る。

経営・活動の推移

【堅実な規模拡大】

昭和57年に経営主の一志氏が父親から母豚50頭の繁殖経営を引き継ぎ、その後徐々に規模拡大し、現在に至っている。経営主の一志氏は、経営規模をむやみに増大せず、経営コストを下げることにより、収益を増加させる

(表1) 経営の推移

年次	作目構成	飼養頭数	飼料作付面積 (a)	経営・活動の内容
昭和57年	養豚	種雌豚50頭		経営主の一志氏、父親から経営継承し養豚を始める
昭和57年	〃	種雌豚90頭		畜舎を建設し、母豚90頭の一貫経営に規模拡大
平成7年	〃	種雌豚120頭		母豚120頭の一貫経営に規模拡大
平成14年	〃	種雌豚230頭		公庫資金を借り入れして豚舎建設し規模拡大を図る
平成16年	〃	種雌豚230頭		畜産環境整備機構リース事業を活用してふん尿浄化処理施設を建設
平成20年	〃	種雌豚230頭	1,000a	牧草地取得
平成26年	〃	種雌豚230頭		密閉式縦型コンポストを建設
平成31年	〃	種雌豚230頭		農場HACCP認証取得

ことが長期的な経営安定につながるとして、飼養規模の拡大は無理せずに堅実にやってきた。昭和57年から平成7年までの間は、自らの経営を客観的に判断して、過剰投資にならないように徐々に飼養頭数を増やしており、平成14年には、後継者の長男の就農と併せて本人が希望を持てる経営ができるように、施設投資のための資金を金融機関から借り入れて飼養頭数を約2倍に拡大して経営の安定化を図った。

経営管理・生産技術の特色

【明確な役割分担】

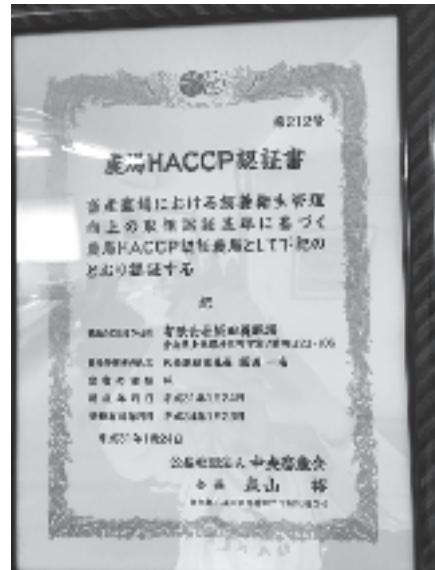
家族5人全員が明確な役割の下で作業を進めている。経営主の妻と長女と長男の妻の女性3人は、細やかな配慮が必要な分娩豚や子豚の管理部門を担当し、長男は技術を要する精液の採取や繁殖部門及び肥育部門を担当している。そして経営主は、経営全体の内容を掌握している。

【経営主のこだわり】

経営主は、養豚経営を持続的に発展していくためには、「家族」や「地域社会」や「人間関係」を大事にしていくことが重要だとし、「安全・安心にこだわった消費者から信頼される豚肉の提供」と、畜産農家が減少する中、とりわけ激減の一途を辿る家族型養豚



(写真3) 繁殖豚舎内部



(写真2) 農場HACCPの認証書

経営が生き残るためには、「高い生産成績と収益性」の確保、「ブランド豚肉の生産」、そして「地域社会との協調・融和」の取り組みを大事にして経営を行ってきた。

【安全・安心へのこだわり】

飯田養豚場は、安全・安心でおいしい豚肉生産とともに消費者との信頼構築、家族の衛生管理意識の向上を図るため、農場HACCP取得に取り組みたいという意欲により、平成26年5月に取り組みを開始。青森県畜産協会が主導し、関係機関と協力しながら平成31年1月に認証を取得した。

今後は、農場HACCPの取り組みをはじめとした飼養衛生管理の向上を図ることで、育



(写真4) 専用出荷プラットホーム

成率、飼料要求率をはじめとした経営指標のさらなる向上が期待される。また、家畜衛生対策として、①徹底した消毒、②オールインオールアウトの徹底、③適正なワクチネーションを行っているほか、分娩豚舎、子豚豚舎、肥育豚舎は、豚の移動後の洗浄・消毒・乾燥を徹底するとともに、朝夕の1日2回、通路消毒と空間消毒を行うことにより、事故率の低減を図っている。また、と畜場への出荷については、豚舎敷地内から500m先に専用出荷プラットホーム台を設けて、そこで委託業者のトラックへの積み替え方式により、農場とと畜場との交差汚染を遮断している。

【繁殖は全頭人工授精】

飯田養豚場は、純粋種のランドレース種と大ヨークシャー種を飼養して繁殖母豚用のLWを自家生産しており、交配方法は全頭人工授精のみで行っている。

このため、外部から繁殖母豚を購入するよりも母豚の更新が容易にできるため、母豚の更新率は53.7%となっている。その結果、1頭当たり年間平均分娩回数2.32回は県の水準よりも若干高く、母豚1頭当たり年間肉豚出荷頭数23.5頭は優れた成績であり、この高い分娩回転数と肉豚出荷頭数が収益の向上に大きな影響を与えている。また、人工授精を採用することによって肥育豚（LWD）生産のための止め雄豚デュロック種の飼養頭数を10頭程度削減できており、飼養管理労働時間や飼料費が大幅に節減されている。加えて、自家生産は、外部から移入される疾病の予防対策や母豚の導入コストの低減にも寄与している。

【高い生産成績と収益性】

分娩直後から離乳までの分娩舎の飼養管理が徹底されているため、哺育開始から離乳までの育成率は89%で優れている（分娩子豚頭

数は11.9頭、離乳子豚頭数は10.6頭）。また、収益性（売上高）に関わる肥育成績のうち枝肉重量78.6kgと上物率70.0%は全国平均および県平均よりも高く、販売収入の増加に貢献している。

飯田養豚場における令和元年度の出荷肉豚1頭当たりの純利益は4,111円であった（平均価格32,973円－生産原価28,862円）。

【担い手同士の勉強会とパソコン管理による経営診断】

青森県畜産協会は、平成28年から次世代の担い手（約6名）を対象とした養豚勉強会を1回当たり2日間で年2回程度開催している。勉強会では外部講師を招聘して、出席者が各自の農場の経営診断書（損益計算書）を持ち寄り生産コスト分析、減価償却、棚卸評価、家畜防疫、海外の事例など多岐の項目について勉強している外、出席者同士による連

(表2) 経営実績 (元年度)

経営概要	労働力員数	家族構成員	6.6人
	(畜産・2000hr換算)	従業員	1.0人
	種雌豚平均飼養頭数		260頭
	肥育豚平均飼養頭数		2,347頭
	年間子豚出荷頭数		0頭
	年間肉豚出荷頭数		5,918頭
収益性	所得率		18.4%
	種雌豚1頭当たり生産費用		678,280円
繁殖	種雌豚1頭当たり年間平均分娩回数		2.32回
	1腹当たり分娩子豚頭数		11.9頭
	種雌豚1頭当たり年間分娩子豚頭数		27.61頭
	1腹当たり哺乳開始子豚頭数		11.25頭
	種雌豚1頭当たり年間哺乳開始子豚頭数		26.1頭
	1腹当たり離乳子豚頭数		10.6頭
	種雌豚1頭当たり年間離乳子豚頭数		24.6頭
	種雌豚1頭当たり年間肉豚出荷頭数		23.5頭
	肥育豚事故率(離乳時からの事故率)		5.90%
	生産性	肥育開始時	日齢
体重			7.5kg
肉豚出荷時		日齢	185日
		体重	115kg
平均肥育日数			159日
出荷肉豚1頭1日当たり増体重			0.676kg
トータル飼料要求率			3.63
肥育豚飼料要求率			3.10
枝肉重量			78.6kg
販売価格		肉豚1頭当たり平均価格	
	枝肉1kg当たり平均価格		419円
枝肉規格「上」以上適合率			70.00%



(写真5) 養豚勉強会の様子

携・情報交換も活発に行っている。長男の大樹氏は、当初から参加しており、「経営診断をするようになり数字で会社を見るようになった。これまで生産現場の仕事が中心であったが、全体的に物事を見るようになった。また、社会情勢も見据えるようになった。」と話しており、成果は、経営管理の改善と生産技術の向上につながっている。

【ブランド肉豚「ほろよい豚」の生産】

飼養している肉豚は、青森県内の酒造会社から出る酒粕の粉末を、配合飼料工場で特別に配合したものを子豚（30kg）の時期から肥育豚の出荷まで給与している。経営主の一志氏は、酒粕を混ぜているせいか、豚の肌つやも赤みを帯びて、餌を食べた後は気持ちよく静かにゆったりとして寝ていると言う。ストレスフリーで生産される肉豚は「ほろよい



(写真6) ほろよい豚のポスター

豚」というブランド名で伊藤ハム系列を通じて県内外のスーパーで販売されている。価格はプレミアムが付いて有利に販売されており、消費者にも肉質が柔らかく脂が甘くておいしいと高い評価を得ている。

地域社会との協調・融和

【畜産環境対策と耕畜連携】

豚舎から排出されるふん尿は、ふんと尿を分離して、ふんは密閉縦型コンポストで処理し堆肥舎で発酵処理しており、良質な堆肥として野菜農家5戸（ジャガイモ、ニンジン等面積25ha）に利用されている外、近隣の農家には堆肥散布のサービスも行うなど耕畜連携を進めている。また、現在、液肥処理している尿については、増頭分も含め種雌豚300頭一貫経営分の活性汚泥処理施設を自己資金で建設することとして工事を開始している。なお、町及び漁協からは処理水の放流の同意を得ている。

地域に対する貢献

【食育等への貢献】

横浜町では毎月19日を「食育の日」に設定し、町内の小・中学校の学校給食では、6月と11月の食育の日には「ほろよい豚」を使用したメニューもある。経営主は、病気など家



(写真7) 堆肥散布サービス



(写真8) 学校給食の豚汁

畜衛生の観点から食の体験学習は困難だが、学校給食への食材提供を通じて「命を頂くことや食べる楽しさ」を伝えていきたいとしている。

【地域畜産振興への貢献】

経営主の一志氏は、横浜町畜産クラスター協議会の会長として、積極的に町の畜産振興の舵取り役や連絡・調整等の役割も担っており、町の畜産振興に貢献している。

生活の視点の配慮

【家族経営協定の締結】

本年9月に「家族経営協定」を締結した。協定書においては、労働時間・休日・労働報酬・農業者年金加入を取り決めたことや、職場における環境整備、技術習得などのキャリアアップ、そして女性のライフサイクルに



(写真9) 女性の活躍

沿ったワーク・ライフ・バランスに配慮した働き方を実施することも定めた。

【職場における環境整備】

現在、種雌豚舎などの増頭工事中であるが新たな施設整備については、労力的に負担が少なく、女性でも作業がしやすいように自動給餌ライン、自動除ふん装置など機械化による省力管理方式を採用している。

将来の方向性

【今後の経営計画】

現在の種雌豚230頭から、当面の飼養規模を種雌豚300頭の一貫経営を目指し工事中である。将来的には種雌豚500頭の一貫経営とする計画である。このため、現在地から2km離れたところに土地を取得済みで地域住民への説明も済んでいる。約12億円の投額が必要となるが、低利な資金融資や畜産クラスター事業等の補助事業を活用することを考えている。

【スムーズな経営継承】

経営主は60歳の定年を迎えたら、経営の代表を長男に譲ることを考えており、長男はそれまでの間に経営主の経営理念をしっかりと引き継ぎ、安心して任せられるよう経営内容を充実させながらスムーズな継承を図りたいとしている。